

幼稚園と保育所の機能を一体化した「総合子ども園」の創設を柱とする政府の子育て新施策「子ども・子育て新システム」関連法案の審議が、国会で始まった。成立すれば、これまでの保育サービスの仕組みが大きく変わることになる。なぜ今「新システム」なのか。少子化対策につながるのか。法案策定に取り組んできた内閣府政策統括官の村木厚子さんに聞いた。

【山崎友記子】

内閣府政策統括官

村木 厚子さんに聞く

—なぜ、新システムが必須なのですか。

村木さん 子育てをめぐり、三つの課題があると考えます。まず、教育や保育を支える基盤が非常に弱くなっています。大都市部では保育サービスが足りず、一方で子どもが減った地方では、幼稚園や保育所の運営が成り立ちにくくなっています。

—なぜ、新システムが必須なのですか。

村木さん 子育てをめぐり、三つの課題があると考えます。まず、教育や保育を支える基盤が非常に弱くなっています。大都市部では保育サービスが足りず、一方で子どもが減った地方では、幼稚園や保育所の運営が成り立ちにくくなっています。

二つ目は、お母さんの子育て

「認可制」から「指定制」へ

幼保一体化で総合的に需要把握

自治体がきちんと把握し、需要を満たすための整備を進める。そのため「仕掛け」が必要で。

村木さん 認可制は自治体が一一定の条件を満たした施設が、一定の条件を満たした施設

子ども・子育て新システム 政府の「税と社会保障の一体改革」のうち、子育て世代に向けた支援策の柱だ。小学校入学前の子どもは文部科学省が所管する幼稚園と、厚生労働省が所管する保育所に分かれ、制度も財源もバラバラだったが、これを「総合子ども園」に衣替えし、窓口は原則、内閣府に一本化する(幼保一体化)。政府は15年度の創設を目指している。



子ども・子育て新システム

政府の「税と社会保障の一体改革」のうち、子育て世代に向けた支援策の柱だ。小学校入学前の子どもは文部科学省が所管する幼稚園と、厚生労働省が所管する保育所に分かれ、制度も財源もバラバラだったが、これを「総合子ども園」に衣替えし、窓口は原則、内閣府に一本化する(幼保一体化)。政府は15年度の創設を目指している。

子ども・子育て新システム 政府の「税と社会保障の一体改革」のうち、子育て世代に向けた支援策の柱だ。小学校入学前の子どもは文部科学省が所管する幼稚園と、厚生労働省が所管する保育所に分かれ、制度も財源もバラバラだったが、これを「総合子ども園」に衣替えし、窓口は原則、内閣府に一本化する(幼保一体化)。政府は15年度の創設を目指している。

子ども・子育て新システム 政府の「税と社会保障の一体改革」のうち、子育て世代に向けた支援策の柱だ。小学校入学前の子どもは文部科学省が所管する幼稚園と、厚生労働省が所管する保育所に分かれ、制度も財源もバラバラだったが、これを「総合子ども園」に衣替えし、窓口は原則、内閣府に一本化する(幼保一体化)。政府は15年度の創設を目指している。

子ども・子育て新システム 政府の「税と社会保障の一体改革」のうち、子育て世代に向けた支援策の柱だ。小学校入学前の子どもは文部科学省が所管する幼稚園と、厚生労働省が所管する保育所に分かれ、制度も財源もバラバラだったが、これを「総合子ども園」に衣替えし、窓口は原則、内閣府に一本化する(幼保一体化)。政府は15年度の創設を目指している。

子ども・子育て新システム 政府の「税と社会保障の一体改革」のうち、子育て世代に向けた支援策の柱だ。小学校入学前の子どもは文部科学省が所管する幼稚園と、厚生労働省が所管する保育所に分かれ、制度も財源もバラバラだったが、これを「総合子ども園」に衣替えし、窓口は原則、内閣府に一本化する(幼保一体化)。政府は15年度の創設を目指している。

に最も身近な市町村が、子どもに必要な幼児教育と保育の両方のニーズを把握し、トータルで保障できるようにすることが大事なことです。「総合子ども園」には、幼稚園と保育所の機能に加え、家で子育てしているお母さんを支える「子育て支援拠点」の機能を持たせたいと考えています。

—新システムは、高齢者が中心だった社会保障サービスの給付を子どもや現役世代に向けていくことが目的ですね。

村木さん 高年齢が進むなか、本当にそれは可能でしょうか。

村木さん 子育て支援の必要性がいわれ始めて20年あまり。「団塊ジュニア」(71〜74年生まれ)が30代後半にさしかかった08、09年ごろには「少子化対策は一刻の猶予もない」と言われ、消費税を財源とした対策が議論されていたのに、そこからもう3年以上がたっている。今度こそ安定した財源を得て、問題を抜本的に解決しなければ。この少子化の時代に子どもを産み、育ててくれている若いお父さん、お母さんに、教育や保育という必要最低限のサービスは用意しなければなりません。

—最初の子どもを産んだ時に孤立感や負担感を感じた人は、明らかに2人目を産んでいません。「また産みたい」と思えるような、社会の応援が大事です。

上の世代は「自分たちは人に頼らず子育てできた」と思っていますが、環境が違います。賃金が低く、長時間労働を強いられる若い世代の厳しい環境が理解されています。子育て世代は日々の生活で精いっぱい、子ども自身は声を上げられない。誰かがちゃんと代弁してあげないといけないと思います。



「子ども・子育て新システム」について語る村木厚子さん—久保玲撮影